

■ 会合報告

世界俳句、十年目の状況——第5回世界俳句協会日本総会2010報告

木村聡雄



正面左から、鎌倉佐弓、秋尾敏、夏石番矢、清水国治

2000年9月にスロヴェニアにおいて世界俳句協会創立大会が開催され、同年12月に協会が正式に設立されて以来、今年2010年に世界俳句協会は10年目を迎えた。この10年の間世界俳句協会は日本国内はもとより、世界に向けて俳句の普及に努めてきた。その結果、いまや世界各国において俳句は世界の共通の一文学形式としてさらに広く認知されるに至ったと言えるだろう。日本でも、当協会の地道な活動によって、「俳句は日本人にしか理解できない文化で、ましてや外国語で書かれた俳句などは俳句とはいえない」といった保守的、前近代的な思い込みから徐々に開放されつつあると思われるのである。

第5回日本総会は2010年4月29日に東京で開催された。出席者は日本を中心に約40名、そのうち日本以外ではモンゴル、ラトビア、クロアチア、ドイツなどの国々から10人ほどの参加者があった。プログラムは、総会、俳句朗読会／音楽伴奏、場所を移して懇親会という3部構成であった。

第1部は総会で、夏石番矢代表のあいさつで幕が上がった。最初に、今年は記念すべき創立10周年であること、そして来年2011年には東京で第6回世界大会を開催予定であることがアナウンスされた。さらに、協会が編纂する多言語俳句出版物年刊『世界俳句』が第6号を数え、参加俳人数もますます増加しつつあるとの報告があった。『世界俳句』については、クロアチアなどの新聞誌上に紹介記事も載った。昨09年、リトアニアでの「ドルスキニンカイ詩の秋ならびに第5回世界俳句協会大会」は、世界俳句協会とリトアニアの詩の祭典が共同開催されたものだったが、この会の成功も報告もされた。今年の夏にはハンガリーにおいて「世界俳句フェスティバル・ペーチ2010」が催される。協会としてもこれに協力して代表団を送る準備が進められている。続いて、鎌倉佐弓会計担当から会計報告があった。

その中で、以前中間法人であった協会が種々の事情からNPO法人へと変わったことが説明された。

この後、出席者の近況報告が行われ、俳句に対するさまざまな思いが語られた。夏石番矢代表は、世界の俳句状況について、日本の俳句関係者の認識をはるかに超えたレベルで俳句が世界の詩の中心になろうとしている可能性を示唆した。また俳画、俳文、連句、さらに朗読や音楽とのコラボなど、周辺ジャンルを巻き込んだ展開が期待できるとも語った。鎌倉佐弓は昨年のリトアニア大会での体験を語った。そこでは若い詩人たちを育てようとする試みが行われているのに対して、日本では詩の地位はあまりに低すぎると主張した。わが国においても育成の必要性があり、世界俳句協会がその助けになればと述べた。清水国治は現代の俳画の傾向について、デジカメの普及を反映して写真を用いたものが増えてきたと語った。また、電子書籍端末（アマゾン・キンドル）を個人で導入したところ、本の新たな可能性が見えたとも指摘した。秋尾敏は、ホームページ担当から国内の渉外担当となった。外国勢ではラトヴィアからはイリーナ・モルスカヤが出席、ドイツからはアンドレアス・プライスが俳句研究のためにWHAインターナショナルとして参加した。今回の総会ではモンゴルの詩人や芸術家たちも集まった。バー・ボルドーは、俳人で翻訳も担当するが、モンゴルでも多くの俳句が書かれて翻訳が追い付かないほどであるという。J・バトイレーデは、モンゴルには俳句協会がまだ存在しないので自ら設立したいとの希望を語った。ヘシグトはモンゴル詩人であるが、今度はモンゴル語で俳句を作ると宣言した。

第2部として、総会会場の隣に設けられた舞台上で俳句朗読会が開催された。朗読句に関しては、紙幅の都合により『世界俳句2010』を参照していただきたい。クロアチア大使で詩人のドラゴ・シュタンブクも加わり、参加俳人たちは日本語または各母国語を中心に英語なども交えて朗読をおこない、それぞれに独自の俳句世界を表現した。ここでは俳句と音楽とのコラボレーションの試みとして、まず須田千香良によるチェロ伴奏、次いでルーマニア出身のポール・フロレアによる華麗なヴァイオリン伴奏に合わせて朗読が行われ、俳句表現の可能性が見えた。

夕方の第3部は場所を変えてレストランでの懇親会である。おいしい欧州風料理の合間をぬって、モンゴル出身のツォルモンが伝統的な馬頭琴（モンゴル風小さな2本弦のチェロのような楽器）で疾走感のある演奏を聞かせた。またモンゴルの歌姫ゲゲン・オヤングも到着して伝統的な歌声を披露した。その感動的な調べに誘われ、先ほどの朗読会でも活躍したふたりの奏者も楽器を手にして予定外の再登場、馬頭琴とヴァイオリン、チェロによる怒涛の即興三重奏へとなだれ込んだ。会場はモンゴル大草原のゲル（テント）か、はたまた音楽の止むことのないヨーロッパのホールかとも思われる異空間へと変貌し、まさに発展しつつある世界俳句にふさわしい芸術的盛り上がりで大喝采が起こった。参加俳人全員によるさらなる俳句朗読も始まり、出席者皆が俳句こそ世界を結ぶと実感して、来年の世界俳句協会大会での再会を誓いあったのである。